

みんなで守り、育てたい、遠野の「お産文化」

復活
遠野の
お産文化
【特集】

「案」 ずるより産むが易し」ということわざがあります。出産には心配事が多いものだけでも、実際に産んでしまうと案じているほどでもないということから生まれたことわざです。

かつての遠野には、各地域に産婆さん(助産師)がいて、妊婦のお産を物心両面から支えていました。すくすく育つ子どもの周りには、お父さんやお母さんだけでなく、おじいちゃんやおばあちゃん、お兄ちゃんやお姉ちゃん、さらには隣近所の人たちがいて、時には厳しく、時には優しくその成長を見守ってくれていました。

「壊」と、地域みんなでお産や子育てを支え合う「愛情」は、母親の不安を解消したり、負担を軽くしたりしてくれる、まさに「遠野のお産文化」でした。

現

代はどうでしょうか—
社会や経済の情勢がめまぐるしく変化する中で、少子化や核家族化が進み、ライフスタイルも多様化しました。出産や子育てを取り巻く環境は大きく変わっています。

たくさんモノや情報があふれる一方で、出産や子育てへの不安と負担は増すばかりです。

母親と家族が不安や負担を感じることなく安心して産み育てられるお産を実現するために、わたしたち一人一人ができることは、地域全体で見守り、手を差し伸べ、支えていくことです。

どんなに時代が変わろうとも、

遠

野では今、安心して産み、育てられる「土壌」が整いつつあり、みんなが支え合う「愛情」が芽生えつつあります。かつてこの地にあった「お産文化」が、多くの人の手によって、よみがえろうとしています。

「お産文化」の舞台である「土壌」を再生し、そこにたつぷりの「愛情」を注いでいくのは今を生きるわたしたち。子どもたちの元気な声をもっともつと広がっていくように、家族の笑顔がずっとずっと続いていくように、みんなで遠野の「お産文化」を守り、育てていきましょう。ここから、これから。

復活、遠野のお産文化 終わり

【参考文献】

バハヤチニカ vol.14(バハヤチニカ編集委員会)、
遠野市母子保健事業情報誌子育てお助けブック、遠野市統計書

愛する子どものために
できることを精一杯。
ここから、これから—



孫の郷翔ちゃん(4つ)と麻翔夏ちゃん(2つ)を青笹保育園に迎えにきた佐々木リョウ子さん(73)。帰り道、小学校から帰ってきたお姉ちゃんの淑乃ちゃん(7つ)も一緒になりました。